



Title	ユースワーカーの役割としての「Bridge」の形成に関する考察：ヨーロッパの事例を踏まえた検討を通して
Author(s)	水野, 聖良
Citation	教育文化学年報. 2025, 20, p. 3-11
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/102533">https://doi.org/10.18910/102533</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ユースワーカーの役割としての「Bridge」の形成に関する考察 —ヨーロッパの事例を踏まえた検討を通して—

水野 聖良

### 1. はじめに

近年、不登校やひきこもり、ニートをめぐる議論から、子どもから大人へ、学校から社会への移行の困難が注目を集めるようになって久しい。教育社会学分野における移行研究では、個人化による若者のアイデンティティのゆらぎ(乾 2010)や、「戦後日本型循環モデル」の崩壊を指摘する研究(本田 2014)から、若者の「生きづらさ」が描かれてきた。

現代社会における個人化や自己責任化の進展と、その帰結としての子ども・若者の「生きづらさ」が議論される中で、彼らを支える取り組みも近年広がりを見せている。中でも子ども・若者の居場所づくりが注目を集めている。

近年では、特にユースセンターと呼ばれるオープンアクセス型の居場所施設が増加している。ユースセンターは、「子ども・若者が、誰でも自分の意思(voluntary)で参加できる、開かれた(open access)場」(IDYW 2012)であることが重要とされている。子ども・若者支援の文脈において、特定の層のみに支援を限定するのではなく、「ユニバーサルを踏まえたターゲット・サービス」(生田 2021, p.70)を提供する重要性が強調されており、2023年のこども家庭審議会によるこどもの居場所部会においても、ユースセンターが課題発見の役割を担っている点が指摘されていた。このように、政策的な流れを大きく受けながら、ユースセンターに対する期待がますます高まっている。

このようにユースセンターの重要性が認識され、実践が拡大するなかで、ユースセンターを運営するユースワーカーの専門性についても議論が重ねられてきた。例えば、居場所づくりの指導者論を検討した水野(2001)は、若者と対等な立場を取り、誘導や指導を行わないことが重要であると述べた(p211)。そして、若者が語ることを聴き、素直な反応をしたり、ワーカーも自己開示を行ったりする必要があると述べている(p220)。昨今の子ども・若者支援とユースワークの接合の潮流を踏まえて、実践者や研究者によって子ども・若者支援政策やその他の専門職との関係を踏まえつつ、担い手の力量形成に関する検討が行われており、「ナレッジ」「スキル」「マインド」「センス」といった形で定式化も行われている(水野 2017, p.107)。

これらの議論は、ユースワーカーが持つべき専門性に関する理念的な内容が中心であっ

た。これを踏まえて、近年では、ユースワーカーの力量形成や専門性の検討を実践現場における営みに光を当てて行なう研究も見られるようになった。例えば、実践者によるストーリーテリングの手法を用いて検討を行なった研究（平塚編 2023）や、若者の視点からかれらを惹きつけるユースワーカーの関わり方を描いた研究（水野 2024a）、ユースワーカーと若者の相互作用を会話分析の視点から検討を行なった研究（執行・大津・寺田 2024）が挙げられる。

しかしながら、これらの研究の分析の主眼は、ユースセンターにおいてユースワーカーがいに居場所的機能を形成しようとしているのかという点であった。その一方で、ヨーロッパの文脈において、ユースワークは、「Space」と「Bridge」を作ることの2点が、実践を構成する重要な要素であると議論されてきた（Council of Europe 2015, p.5, Williamson 2020, p.14）。ここでの「Space」形成は、若者が今を経験し楽しむための空間づくりや、学校、労働市場などの場で欠落している空間を若者自身が作ることのサポートを指す。また「Bridge」形成は、若者が将来への道筋において十分な情報を得た上で目的を持ちながら歩むためのサポートを行うことや、社会的排除のリスクがある若者の社会統合をサポートする橋渡しの役割を果たすことであると説明されてきた。これらを踏まえると、日本国内におけるこれまでのユースワーカーの専門性や力量形成をめぐる主な議論は、若者の「Space」を作ることであったと考えることができるだろう。

そこで本稿では、特に「Bridge」の形成という点に着目して、ヨーロッパではどのような役割がユースワーカーに期待されているのかという点を検討する。それらを踏まえて、日本におけるユースワーカーの専門性の議論に新たな視点を提示することを目指す。

## 2. 調査概要

本稿のデータは、筆者が2024年7月12日～7月24日までの約2週間、ルーマニアで行ったフィールドワーク調査によって得られたものである。7月12日～7月19日までは、Erasmus+の経済的支援のもと、定期的に<sup>①</sup>EU諸国間で実施されるTraining Courseの1つである「Media Literacy Erasmus+ Training Course」に参加した。このTraining CourseはEU加盟国のユースワーカーが所属する団体を通して応募し、参加することができるものである。今回は、ルーマニアにおいてEU政策に携わるAさんからお声がけいただき、若者支援や政策に携わる実践者や研究者、合わせて5名が日本から派遣されるに至った。日本はEU加盟国ではないため、他の参加者のように交通費のサポートはないものの、現地での滞在費（宿泊費・食費）はEUやルーマニアの若者支援団体の補助を得て無償であった。内容に関する詳細は、3.2にて記載する。

そして、7月20日～7月24日までは、筆者個人でルーマニアのユースセンターを訪問し、参与観察やユースワーカーへの聞き取り調査を実施した。ユースセンターやユースワーカーは、Aさんを通して訪問や調査への協力を依頼した。本稿で用いるインタビューデータ

は、X ユースセンターの敷地内で、センター長である B さんに 1 時間程度行った。対象者に許可を得たうえでインタビューを録音し、文字起こしを行ったのちに分析した。

フィールドワークやインタビューに際する会話は全て英語で行ったため、インタビューの文字起こしと分析は英語のままで行い、分析を行った後にデータとして用いる箇所を日本語に訳した。

### 3. 結果

#### 1) Media Literacy Erasmus + Training Course への参加を通して

ユースワークは EU の若者政策における重要な柱の一つであり、その支援のもと、毎年多くの国際的なユースワーカー研修が開催されている。EU 加盟国の若者支援団体はこれらのコースへの参加が奨励されており、今回はさまざまな縁が重なり、日本からルーマニアで実施される研修に参加することとなった。

本研修は「Media Literacy Erasmus+ Training Course」という名称で開催された。テーマの背景には、デマやフェイクニュースの増加に伴い、メディアリテラシーの向上が喫緊の課題となっている現状がある。本研修では、参加者が効果的なファクトチェックの方法やその方針について学ぶとともに、複雑化するメディア環境の中で若者をどのようにサポートできるかを、参加国のユースワーカーとともに実践知の共有を行いながら検討することを目的としていた。具体的には、ブルガリア、ギリシャ、ポーランド、イタリア、ポルトガル、マルタ、ルーマニアから集まったユースワーカーの合計 32 名から実践を学びつつ、異なる専門性や立場を持つ参加者と協働しながら、日本の文脈に適した実践方法を検討する機会となった。参加者の年齢は、10 代～40 代で、特にブルガリアやルーマニアからはユースワーカーだけでなく、団体のユースワーク活動に参加する 10 代、20 代前半の若者も参加していた。国内外の実践的な立場の方々と協力しながらコースワークを進めることで、ユースワーカーの専門性を多角的に模索する貴重な経験を得ることができた。コースワークの具体的なスケジュールは以下の通りである（図 1）。

コースワークの最初の 2 日間は、代表国同士がチームとなって、若者向けのメディアリテラシーに関するアプローチを紹介するワークショップや活動を主催した。ここでは、実際に各国においてどのような方法でメディアリテラシーの向上をめぐるユースワークが国レベルまたは組織レベルで行われているのかが紹介された。3 日目では、ここまでの各国の紹介を踏まえた上で、今後実際にユースセンターなどの場においてイベントやアクティビティを行うとなった場合に、どのような年齢層に対してどのような目的のツールを準備するのかといった事柄を国や年齢を超えたチームを組んで検討を行い、開発まで取り組んだ。4 日目はエクスカースョンとして参加者で観光し、最終日の 5 日目は、各々が代表している組織を紹介し、どのような取り組みで今後コラボレーションができそうか意見交換を行った。

	Saturday	Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
08:00 - 09:00		Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast	Breakfast
09:00 - 10:30		Introduction	Activity Poland	Research for instrument		NGO Fair	
10:30 - 10:45		Coffee Break	Coffee Break	Coffee Break		Coffee Break	
10:45 - 12:00		Activity Romania	Activity Malta	Research for instrument		NGO Fair	
12:00 - 12:15		Coffee Break	Coffee Break	Coffee Break		Coffee Break	
12:15 - 13:30		Activity Bulgaria	Activity Italy	Development of instrument		Networking session & Collaboration	
13:30 - 15:30		Lunch Break	Lunch Break	Lunch Break		Lunch Break	
15:30 - 17:00		Activity Latvia	Activity Japan	Development of instrument		Networking session & Collaboration // Future Plan Activities	
17:00 - 17:30		Coffee Break	Coffee Break	Coffee Break		Coffee Break	
17:30 - 18:50		Activity Portugal		Presentation		Dissemination Activities	
18:50 - 19:00	Arrival of participants	Reflection time	Reflection & Conclusions	Reflection Time	Cultural Visit Day	Reflection Time	Departure of participants
19:00 - 20:00	Dinner	Dinner	Dinner	Dinner	Dinner	Dinner	
20:00	Getting to know in each other		Intercultural Night				

図 1 Media Literacy Erasmus + Training Course スケジュール

とりわけ、3日目のワークが興味深かったため、ここで詳しく紹介したい。このワークでは、それぞれの国に帰った際に、ユースワークにおいて実際に使えるツールを開発することが目的であった。「メディアリテラシー向上による過激化対策ツール」「批判的思考力向上ツール」「情報に基づいた意思決定ツール（市民/政治的エンパワーメント）」「メディアリテラシー基礎学習ツール」「ソーシャルメディア消費に関する意識向上ツール」などの5つの開発ツールから1つ選んだ上で、若年層向けツール（15-20歳）、学生向けツール（20-25歳）、成人教育者/ユースワーカー向けツールの対象年齢層を選択した上で開発を行った。

筆者が所属したチームでは、若年層向けの「メディアリテラシー基礎学習ツール」の開発を行った。チームの半数が高校生だったこともあり、若者のためにという教育や擁護的な視点からではなく、若者ととともに純粋に取り組んでみたいと思えるのかという視点からツールの開発ができたことも新しい視点であった。

コースワークを通して、ヨーロッパにおいては、若者といかに関わるのかといった時に、若者との関係性構築の議論だけでなく、若者を取り巻く環境（今回の場合はメディア）を把握し、若者とともにクリティカルな視点を持ちながらメディアを捉えていくにはどうすればよいのかといった事柄が重視されていることを理解した。つまり、どのように若者を取り巻く社会を変容させることができるのかといった点が、ユースワーカーの力量形成という点において大事にされているといえるだろう。

## 2) ユースワーカーの声からの検討を通して

続いて、ユースワーカーの声から、ユースワーカーが担うべき役割やユースワーカーとしての専門性をどのように考えているのかについて検討していきたい。ユースワーカーへのインタビューの中で、筆者がユースセンターの価値について尋ねたところ、3つの点が挙げられた。第一に、ユースセンターは若者にとって安全な居場所であり、路上で過ごす時間を

減らすことで、薬物使用などのリスクを避ける役割を果たしている。ここでは若者同士が交流し、安心して過ごせる環境が提供できる。第二に、多くの保護者は仕事やさまざまな問題を抱え、若者と十分な時間を過ごすことが難しくなっている。一方で、ユースセンターでは特定のプログラム、特定の機会について知っている人たちがいるため、必要なサポートを行うことができる。そして上記の 2 点に加えて、学校教育の現状との対比でその重要性が以下のように語られた。

B さん：ここは若者たちがイニシアチブを発揮できる場です。残念ながら、ルーマニアの教育制度は服従を基本としています。ここでは、若者はイニシアチブを持つことを奨励されています。私たちは未来の市民を積極的に育成する必要があります。そして、ユースセンターの利用を通して、かれらは質問することができるようになり、10 代の時点から（批判的思考のもと）何かできるようになる。だから、いろいろな面でメリットがあります。

（2024/7/24 インタビューより）

B さんの語りから、社会で生じるさまざまなことに疑問を持つことが奨励され、若者がイニシアチブを発揮するための場所としてユースセンターが位置づけられていることが理解できる。さらに、以下の語りからは、ユースセンターが他のシステム、とりわけ学校に対して影響を持つ場であると捉えられていることも理解できる。

筆者：学校も変わっていくべきだと思いますか？

B さん：もちろんです。でも学校を変えるためには、NGO や教育システムに圧力をかける人たちが必要なんです。

筆者：それが、NGO がやるべき仕事の 1 つという認識ですか？

B さん：明らかにそうです。より批判的思考を持ち、NGO を設立するために時間を投資し、何かを提唱しようとする若者が増えれば、より強力な NGO ができるはずです。しかし、もし教育システムがこのような人材を生み出さないのであれば、それはループのように続きます。だから、ユースセンターは（ループを壊す）何か破壊的なものになりうると思いますね。

筆者：なるほど。日本では、学校と NGO はお互いに距離を置いているような気もしますし、影響を与え合う存在として認識していない気もします。

B さん：ルーマニアも距離は置いているかもしれませんが。でも（学校に対して）大いに影響やプレッシャーを与えることはできるはずですよ。

（2024/7/24 インタビューより）

ここでは、ユースセンターが教育システムの 1 つとして位置付けられ、学校システムに



対して働きかけることで社会の変容を促す場として捉えられていることが分かる。ここまでの B さんの語りを踏まえると、ユースセンターは若者に安全な空間と必要な情報を提供するだけでなく、若者とともに学校や社会の諸システムを批判的に捉え、変容を促す役割を担う場として位置づけられていることが理解できる。

このような認識のもと、ユースセンターでは若者の社会参画を促し、若者とともに社会変容を促すことを意識したイベント作りに力を入れていた（図 2）。ダンスやヨガ、アートや服飾、ギターなど若者にとって親しみやすいものから、ルーマニア語やウクライナ語の講座、性教育やドラッグ予防と幅広いイベントが行われていた。写真からも分かるように、1 日につき 2〜5 つ、それぞれ 2 時間程度のイベントが開催されており、ユースワーカーもイベントの内容を詰めることに時間を割いている印象であった。

図 2 X ユースセンターのイベントボード

加えて、イベントを作る際には、Council of Europe Manuals and Handbooks（図 3）と呼ばれる EU 議会が作成したインフォーマル教育のハンドブックも活用されていた。このハンドブックはオンライン上で誰でも閲覧できる<sup>(2)</sup>。ハンドブックでは図 3 の例に挙げたように、ジェンダーに基づく暴力や人権、ヘイトスピーチへの対抗といった若者を取り巻く問題などをテーマに扱っており、基本的な定義や議論から若者とともに取り組むことができるアクティビティが約 20 個紹介されている。アクティビティの実施に際しては、対象となるグループの規模や要する時間、必要な物が示されており、ファシリテーターへのアドバイス等も詳細に記載されている。後半部分では、テーマに関連して、ユースワーカー自身が実践を振り返り、省察に役立てることができる問いが立てられている。

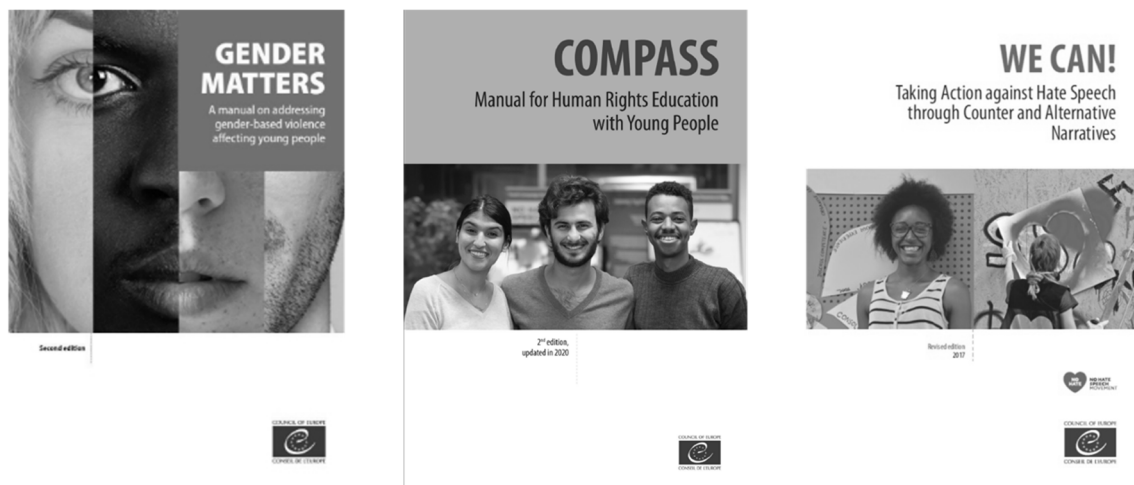


図 3 Council of Europe Manuals and Handbooks

例えば、『Gender Matters』のマニュアルでは、ジェンダー・ステレオタイプやジェンダー・バイアス、ドメスティック・バイオレンス、LGBT+など、ジェンダーに関する多様なアクティビティが紹介されている。これらのアクティビティは、学校やメディア空間など、さまざまなシチュエーションを想定して構成されている。

「The Knight in Shining Armor（正義の味方）」（pp.116-119）を例に挙げると、ロールプレイングを通じてドメスティック・バイオレンスなどの虐待を認識する難しさを考え、暴力や抑圧を伴う可能性のある関係性が、社会によっていかにロマンティックなものとして捉えられているかを検討し、そのような規範がどこから生じているのかについて話し合うアクティビティとして位置づけられている。このアクティビティの対象は 10 名から 20 名の若者で、所要時間は 60 分とされている。ファシリテーター向けのガイドには、参加者にとって感情的な負荷がかかる可能性があるため、信頼関係が築かれていないグループでは実施を避けることが推奨されている。また、言いたくないことは無理に話さなくてもよいという安心できる環境を整えることや、参加者が動揺した際の対応を事前に準備しておくことの重要性についても言及されている。さらに、テーマを深めるための同じハンドブック内の別のアクティビティも紹介されている。またテーマに関連する対策の検討や、居住地域にあるホットラインやシェルターを若者とともに検索することの重要性についても記載されている。

#### 4. まとめと考察

本稿では、ユースワーク実践を構成する要素の一つである「Bridge」の形成に着目し、ヨーロッパにおいてユースワーカーにどのような役割が期待されているのかを検討した。

ルーマニアでのユースワーカー研修への参加やユースセンターの訪問を通じて、ユース



ワーカーの役割の一つとして、若者とともに社会システムに批判的な視点を向け、変容を促すことが含まれていることを理解した。特に、Bさんの語りに見られるように、ユースセンターは若者に安全な空間と必要な支援を提供する場であるだけでなく、若者とともに社会へ働きかけ、変容を求める場としての役割も担っているという共通認識がヨーロッパでは根付いているように感じられた。つまり、ユースセンターは若者の社会適応を目的とするのではなく、社会変容を促す場として位置づけられ、そこで働くユースワーカーもまた、若者とともに社会変容を推進することが期待されているといえる。この点は、Council of Europe がインフォーマル教育を通じて社会に対する批判的な視点を養うためのハンドブックを作成していることや、Erasmus+がクリティカルシンキングのツール開発を目的とした研修を各地で開催し、参加者には食費や滞在費を全額支給することで積極的な参加を促していることから読み取ることができる。

今回のフィールドワークを通して、日本のユースセンター研究では、より良い「Space」（「居場所」）の形成に関する議論は盛んである一方（平塚編 2023, 水野 2024a, 執行・大津・寺田 2024）、若者とともに社会変容を促す「Bridge」の形成に関する議論は十分に進んでいないことを認識した。日本のユースセンターを対象としたフィールドワークにおいても、「Space」と「Bridge」の双方の形成を目指した関係性構築が行われているという議論は行われているものの（水野 2024b）、そもそも、日本において「Bridge」を形成するとは何を指すのか、その概念自体を検討する必要があると考えられる。

この点については、日本帰国後にユースワーカーを対象としたワークショップで「Space」と「Bridge」の概念を紹介した際にも、多くの疑問が寄せられた。例えば、「Bridge」を築くためには、その先の社会にもアプローチしなければ、「Space」としての場をいくら整えても十分な意味をなさない可能性があるということは示唆的であったが、「Bridge」をどう捉えれば良いのかが難しいという声があった。また、日本において「Space」は「居場所」として比較的明確につなげて考えることができる一方で、「Bridge」に関しては若者の生活に「架け橋」をつくるということが何となく理解できるが、その具体的なイメージを描くのが難しく、日本の概念体系の中で「Bridge」に相当するものが十分に社会的に認知されていないのではないか、という議論もなされた。

今後の課題として、日本において「Bridge」を形成するとはどのようなことを指すのかという概念的な整理を進めるとともに、現代日本社会において「Bridge」の先がどこにあり、どのように築く必要があるのか、さらにユースセンターにおいて何ができるのか／できないのかといった実践的な検討を深める必要がある。その際、今回のルーマニアへの訪問を通して得られた知見を活かしながら、より具体的な考察を展開していきたい。

#### 〈注〉

(1) 2025 年 4 月から 2025 年 7 月までに実施されるコースは 51 件となっている。

SALTO-YOUTH 「European Training Calendar」 SALTO-YOUTH (オンライン),

<<https://www.salto-youth.net/tools/european-training-calendar/browse/>>, (2025 年 2 月 12 日閲覧)。

(2) ハンドブックの詳細に関しては、以下のウェブサイトから確認することができる。

欧州評議会 (Council of Europe) 「Manuals and Handbooks」 Council of Europe (オンライン) , <<https://www.coe.int/en/web/youth/manuals-and-handbooks>>, (2025 年 2 月 12 日閲覧)。

### 〈引用文献〉

Bernard, Davies, 2021, *Youth Work: A manifesto Revisited -at the time of Covid and beyond*, Youth and Policy.

Council of Europe, 2015, *Declaration of the 2nd European Youth Work Convention: Making a world of difference*, European Youth Work Convention.

平塚眞樹編・若者支援とユースワーク研究会著, 2023, 『ユースワークとしての若者支援』大月書店。

本田由紀, 2014, 『もじれる社会：戦後日本型循環モデルを超えて』ちくま新書。

Howard, Williamson, 2020, *Cornerstone Challenges for European Youth Work and Youth Work in Europe Making the Connections and Bridging the Gaps*, European Youth Work Agenda Bonn.

生田周二, 2021, 『子ども・若者支援のパラダイムデザイン』かもがわ出版。

In Defence of Youth Work, 2012, *This is Youth Work : Stories from Practice*.

乾彰夫, 2010, 『「学校から仕事へ」の変容と若者たち』青木書店。

水野篤夫, 2001, 「居場所づくりの指導者論」田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房, p.210.

水野篤夫, 2017, 「若者施設を基盤としたユースワークの展開とそこにおけるスタッフの専門性」日本社会教育学会年報編集委員会編『子ども・若者支援と社会教育』東洋館出版社。

水野聖良, 2024a, 「ユースセンターに通うことをめぐる意味づけの変容 —「常連」の高校生の経験に着目して—」『子ども社会研究』第 30 号, pp.111-130.

水野聖良, 2024b, 「『Space』と『Bridge』の形成を目指した関係性構築 —ユースセンターで実践される工夫としての趣味嗜好の活用—」『社会教育学研究』60 巻 2 号, pp.29-41.

執行治平, 大津恵実, 寺田純子, 2024 「青少年の育ちを支える『居場所づくりの方法論』の解明にむけて：日常の関わりに対する会話分析的な観察から」『社会教育学研究』60 巻 2 号, pp.43-50.

### 謝辞

本稿は、大阪大学超域イノベーション博士課程プログラム（2024 年度自主実践活動）の助成による成果の一部である。